

ナガバノダケカンバ *Betula ermanii* Cham. var. *japonica* (Shirai) Koidz.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 14。山地性の樹木で、愛知県では生育地、個体数ともに少ない。

【形態】

落葉性の高木。幹は直立し、高さ 20m に達する。樹皮は淡赤褐色で、横に著しく紙状にはがれる。枝には長枝と短枝がある。葉は長枝には互生、短枝には 2 枚が対をなしてつき、葉柄は長さ 2~2.5cm、葉身はやや長い卵形、長さ 7~10cm、幅 3.5~6cm、先端は鋭尖頭、基部は切形~浅い心形、辺縁には不ぞろいな鋭鋸歯があるが明らかな重鋸歯にはならず、表面は深緑色、裏面は淡色で腺点が多い。葉の側脈は 10~13 対である。花と果実は未確認であるが、小林 (2010, 2012) によれば愛知県でも開花結実しているという。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根 (芹沢 87702, 2012-7-7)。

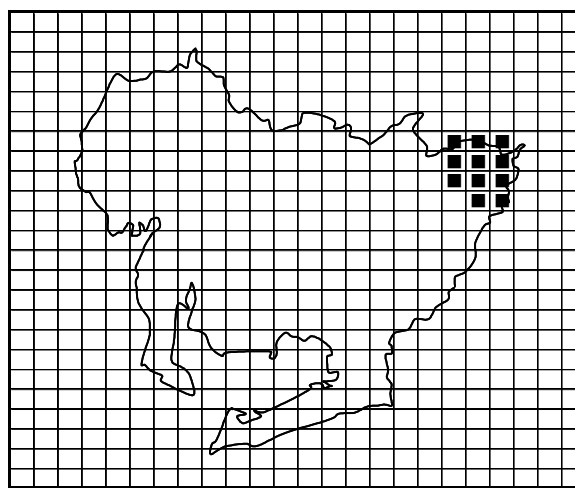
【国内の分布】

本州 (関東地方、中部地方)。中央部から太平洋側に多く、長野県南部や静岡県ではそれほど稀なものではないらしい。日本海側では、最近富山県にも生育していることが報告された (設楽・相原 2019)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸北部、ロシア沿海地方。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地帯の沢沿いに、点在して生育することが多い。基準変種のダケカンバは亜高山性の樹木で、葉は卵形、側脈は 8~11 対、葉縁には著しい重鋸歯があり、沢から離れた場所にも多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

沢沿いの二次林内に、数本が生育している。伐採時に長野県方面から入ってきたものと思われ、最大の個体は樹高 15m 程度に育っている。比較的若い個体も見られる。林が伐採されなければ、しばらくは現状のまま存続するものと思われる。

【保全上の留意点】

生育地の個別的な保全が必要である。

【特記事項】

独立種と見なし、チョウセンミネバリと呼ぶ人もいる。小林 (2010, 2012) によりダケカンバとして愛知県に生育することが記録された植物で、レッドリストあいち 2015 およびグリーンデータブックあいち 2017 ではその名で収録した。以前から存在を知っていた個体であるが、まさか愛知県にダケカンバ系の植物が生育しているとは思わず、見逃していたものである。シラカンバからは、樹皮がやや赤味を帯び、葉の側脈が多く、果穂は上向きにつくことで区別される。シラカンバも愛知県が分布域の南限で、県内では三河山地に点在するほか、21 下山 (芹沢 61935, 1992-6-26)、38b 日進 (芹沢 62279, 1992-7-27) などでも確認されている。

【引用文献】

小林元男. 2010. 第 7 章第 2 節 愛知県の絶滅危惧植物. 愛知県史編さん委員会(編), 愛知県史別編自然 574-596. 愛知県.
小林元男. 2012. 愛知県樹木誌. 620 頁. 自刊.
設楽拓人・相原隆貴. 2019. 富山県におけるチョウセンミネバリ *Betula costata* の分布の現状. 植物地理・分類研究 67:149-151.

【関連文献】

平木本 I p.58, 平新版 3 p.113.